

共生・公正・創造



ユニオン・EYE

<http://www1a.biglobe.ne.jp/jrtu-EWU>

ジェイアール東日本労働組合
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290
発行者/今井 伸 編集者/久保田勉

“異形の労働組合指導者『松崎明』の誤算と蹉跌”

「国鉄改革の裏側」ダイジェスト版 第18回

あの元国鉄労働課長が明かす「国鉄改革の裏側第6弾」が【異形の労働組合指導者「松崎明」の誤算と蹉跌】という本になった。本紙は筆者（宗形明氏）の了解を得て、『JR東日本革マル問題の真相と現状』をダイジェスト版として紹介することとした。



「われらのインター」で吠えまくる松崎…その4「エース千葉勝也氏が委員長就任！」

…石川尚吾委員長退任の後を受けて書記長の千葉勝也氏がJR東労組委員長に昇格・就任した。何やら「エース登場！」の趣がある。というのは平成14年、例の嶋田氏ほか東労組本部役員大量辞任事件当時、私の許へ届いていた情報では、ショートトリーフと思われていた角岸氏が再任、“嶋田氏排除”となった裏事情として、松崎顧問（当時）の意中の人は、最初から腹心の千葉勝也書記長であり、ただ若すぎることから、とりあえず「角岸氏再任」として、その間に「嶋田氏定年」で、角岸氏から千葉書記長に繋ぐというのが、松崎氏の戦略構想だという噂が根強く囁かれていたからだ。平成20年、JR東労組第24回定期大会は6月13日から15日にかけて秋田県民会館で開催された。役員人事大会でもあった。

この人事で私が特に興味を持ったのは、全員が東京勢であることと、第11代本部青年部長の経歴を持つ千葉勝也氏が、松崎氏に唯々諾々と従ってきたことで知られた石川尚吾氏の後を継いでこの重大時期の本部委員長に就任したことの二点である。遂にエース登場！の感が深い。動労（東労組本部青年部長）は、創設者であり初代の松崎明氏以来、栄光のポストであり、事実、錚々たる人物がその名を連ねてきた。私の記憶では、第8代までが次の順序になる。松崎明→鈴木真一→城石靖夫→上野孝→松本正一→大江支農夫→大久保孟→中泉茂。そして、新委員長の千葉勝也氏は確か第11代本部青年部長の筈である。…しかし、知る人ぞ知るこれら錚々たる人物でも、松崎初代青年部長以外は本部委員長のポストについてはこれまで誰もいなかった。それが今回、本部青年部長の経歴を持つ愛弟子、千葉勝也氏が東労組本部委員長に就任したのである。が、同時にこれは、「いよいよ松崎が背水の陣を敷いた」と言えなくもない。なお、公安警察筋の情報では、上掲の8名の本部青年部長経験者の内に4名のトラジャが居るといふ。これはなんとも物凄いことではないだろうか？！“トラジャ”とは、【国鉄分割民営化直前の86年、松崎を中心とした旧動労革マル派が、組合活動家を抜擢し革マル派本体に送り込み、職業革命家としての訓練をうけさせたグループである。要するに、トラジャは党中央の直属組織で、その給料は党から出ているというわけだ。『松崎明秘録』などによると、JR総連・東労組周辺では坂入事件以前においても、革マル派による拉致・監禁事件が幾度も発生しており、第4代本部青年部長上野孝氏はその当事者であり、組織逃亡、国外脱出のドラマを経て異境の地、オーストラリアで客死。また、第6代本部青年部長大江支農夫氏は小谷昌幸氏に先行して動労時代、中核派による内ゲバ襲撃被害者第1号であった模様でもある。ともあれ、私が今年の東労組大会役員人事の結果を見て強く感じたのは、最高権力者・松崎明の地位は盤石ということである。他方、JR東日本役員人事においても、国鉄時代から松崎・動労との二人三脚性を指摘されてきた運転系役員の着実な基盤強化が感じられる。千葉勝也新委員長の舵取りの方向性と、従来の東労組偏重労政に変化の兆しが見え始めたJR東日本労使関係の今後の動向を、注意深く見守っていかなければならないと思う。

【異形の労働組合指導者「松崎明」の誤算と蹉跌（高木書房）P.173～P.177】